



視点

性教育との出会い、 25年をふり返って

滋賀HALサークルに加入したのは25年前。サークルの代表である脇野千恵さんに誘われたことがきっかけでした。「性教育と一緒にやってみない？」と、言われた時には、「性教育!？」って…。興味はあるけれど、わたし自身何ができるのか、全く想像がつかなかったのが本音でした。

実は、わたしが学んでいた短期大学では、性教育の授業がありました。担当の教授が、「性教育を学ぶことができる学校は、ほぼありません。君たちはラッキーです。」と、おっしゃったことをよく覚えています。確かに当時だけでなく、学生が性教育を学べる機会は、残念ながら現在でも少ないのではないかと思います。授業では、性の基礎知識として、「男性・女性のからだの仕組み」、「月経の仕組み」や「妊娠と出産」などを詳しく学ぶ中で、“月経がなぜ起こるのか”、“月経周期は個人差がある”など、女性の体に起こっているのにも関わらず、知らずにいたことが多くて驚きました。よく「性について教える必要などない。そのうち自然に知るものだ」と、見当はずれなことを唱える人もいますが、「性は、正しい知識を学ぶことで安心・安全な生き方につながる」と思っています。これは、自身の性の学びのベースになっていると言えます。

サークルには、脇野さんの他に、小学校教諭の望月久美子さん、養護教諭の今は亡き寺田敏子さんがいて、みんなと一緒に活動することが、とても心地良かったです。そこで、わたしが加わってから取り組んだことの中で、特に印象的だったことを2つ紹介します。

1つ目は、「ペニスの模型」という教材作りです。性教育の授業で、男子の性器の洗い方や射精のしくみを分かりやすく教えるために

考案したものです。ホームセンターや百貨店、ショップなどを駆け回って材料集めをし、いくつかの試作品と検討を重ねて完成させました。これまでの全国セミナーに参加された皆さんの中にも、購入していただき役立ててくださった方がいらっしゃるかもしれません。

2つ目は、2002年にメンバーで『ちんちんがやってきた』を出版できたことです。本の出版など素人のわたしたちには、夢のような話でした。当時学んでいた『家族療法』の団士郎先生に相談に乗っていただき、「男の子のお母さんになった人が読む本」とターゲットを絞って企画を進めました。平日は仕事を終えてから、休日はメンバーの家や活動の拠点である支援センターに集まって、自分たちが伝えたい内容を盛り込んだ本作りのために、頭を寄せ合い話し合いを繰り返しました。出来上がってきた本を手にした時の喜びは忘れられません。どちらも大変な作業でしたが、一緒にやれる仲間がいたからできたことだと思います。

そして、今は性について気軽に相談できる場として『まちの保健室「ちむちむ」』を開き、地域で性教育を広める活動に取り組んでいるところです。サークルのメンバーでいつも話していたのは、「細く長くやっていけたらいいね!」でした。これからも自分たちにできることを地道に取り組んでゆきたいと思っています。



本城 一美
(滋賀HALサークル)